

エライザに

はじめに

運命にもてあそばれているのだ。

ウィリアム・シェイクスピア『ロメオとジュリエット』
(一五九五年頃)

ハゲワシのおかげなのだ。この本を書いたきつかけを聞かれるたびにこう答えることにしている。羽に興味を持つようになったのはハゲワシのおかげだからだ。もう何年も前になるが、ケニアでハゲワシを観察する野外調査に参加したときのことだ。屍肉に集まって争ったり、シューシューと威嚇声を出したりしているのを見ていたとき、羽の有無がハゲワシの生き方と見事に調和していると感心したからである。ハゲワシの頭と首には羽が生えていないが、屍肉の中に首を突っ込んで採食するときには、この方が汚れが付きにくいだけでなく、日中の暑いときには、首を伸ばして熱を逃がし、夜間は襟の綿羽うの中に首を引っ込めて体温を保つ体温調節の機能も果たしている。正羽せいうは黒っぽい色なので細菌せいきうに対する抵抗性が強い上に、アフリカの暑い日差しを吸収するので、獲物を求めて気温の低い高空を帆翔はんしょう

(羽ばたかずに翼を広げ、風に乗って飛ぶこと) しているときに、体温の低下を防ぐ役にも立っている。

ハゲワシのおかげで羽に興味を持ち始めてから、ヒタキやヨタカの仲間が繁殖期に体長の三倍もある尾羽をひらひらさせて飛ぶところや、水を通さないサテンのような羽毛に覆われたペンギンが浮氷の下へ飛び込む姿も見てきた。氷点下の夜、私が羽毛の寝袋の中で縮こまって寝ている傍らで、研究対象にしていたキクイタダキたちは羽を膨らませただけで、身を切るような風も苦にならないようであった。恐竜化石に残された羽の痕をトレースしたこともある。飛行機、釣りの疑似餌^{ルアー}、ヴェイクトリア朝の帽子、パドミントンのシャトル、矢羽^{ヤバ}、古代ペルーの工芸品に使われている羽を調べたこともある。鳥類学者のフランク・ギルが『鳥類学』という著名な教科書の中で述べているように、「羽は何世紀にもわたって生物学者を魅了してきた」。本に書くには、ピッタリのテーマだと常々思っていたが、もう一度ハゲワシに出会うまでは、執筆に取りかかる決心が固まっていなかった。

野外生物学者として、研究や書く対象に窮したことはなかった。自然界にあるものなら、何でも対象になるからだ。屋外に一歩足を踏み出せば、必ずといってよいほど興味を引かれるものに出会うので、興味を持ってないときは、よほど気が散っているときだ。ハイキングに出かけると、私は鳥の巣、蝶、地衣類、アリ塚、土壌、虫の糞、岩石など、何にでも気を取られてしまうので、私と一緒に出かけられることに辟易する人もいる。家の冷蔵庫には植物標本、未同定のハチを入れた箱、古い骨、フクロウの頭部、興味深い甲虫の幼虫が詰まった大きな容器が入れてあるし、冷凍庫にはモグラや小鳥の死体が押し込んである。妻のエライザはこうした異様なものを我慢してくれている。息子のノアも妻と同じように我慢しているのだろうが、まだ幼いので、他のものを知らないのだ。私は好奇心の塊なので、何にでも興味を持ってしまい、対象を絞ることが苦勞の種である。

科学の研究は金がかかるので、研究資金を獲得する必要があるが、その段階で研究対象になる候補は絞られてしまう。助成金を獲得するためには、時代に見合った魅力的なテーマが必要になるからだ。当然のことながら、コケやカビやコメツキムシよりもクジラやトラの方が助成金を取りやすい。野外生物学の基礎研究で助成金を得るのは非常に難しいので、生息環境の分断化、種の保全、集団遺伝学、戦争が生態系に及ぼす影響などといった大きなテーマで研究計画を立てることが多い。しかし、ようやく新しい本に取りかかる時間ができたとき、取り上げたいテーマが多すぎて手に負えないことに気づいた。第一日目は白い頁^{ページ}を目の前にして、コーヒーをすすりながらしばらく思索していたが、結局、何年も前から書こうと思っていたハゲワシの話(第15章)を書き始めた。ハゲワシの話は創造力を呼び覚ますだけでなく、「羽の本」を書くのにも役に立つだろうと考えたからだ。

私は筆の進みが速い方ではないが、それでも昼までには数段落の下書きが終わった。島に住んでいるが、自宅は町から八キロほど離れている。町までは森を抜け、農場の間を走る緩やかな下り坂の田舎道が続いている。その田舎道をハゲワシや羽のことを考えながらジョギングをしていると、死んだ動物の腐敗臭がだんだん強くなるのを感じた。木立に入ると、側溝の脇に肋骨をさらしたシカがひっくり返っていた。おそらく、車にはねられたのだろう。そして、ハクトウワシの若鳥が頭上に張り出した椏^{もみ}の枝からじつと下を見下ろし、そのさらに上の枝には四羽のヒメコンドルが暗い影のように並んでいた。四羽はハゲワシ類特有の背を丸めた姿勢で、赤い頭を下げて、静かにこちらを睨んでいた。

私がゆつくりと近づくと、枝の端にとまっていた一羽が突然、飛び上がった。羽ばたくたびに澄んだ秋の空気を切る音を残しながら、ぎこちない飛び方で枝の間をすり抜けると、体を強く傾けて道路の上の開けた空の方へ飛び去ったが、頭上を通り過ぎるときに、左の翼から何かが落ちてくるのが目に入っ



読書するハゲワシ

た。それは風に舞い、クルクルと旋回すると、空中に漂い、さらに旋回しながら、私の足元に落ちた。美しい曲線を描いた褐色の長い風切羽^{かきばね}だった。羽は道路の上に、括弧の片一方のように横たわっていた。私は科学者だし、迷信などは信じない。占星術を読んだり、運勢を占ってもらったりはしない。しかし、手の込んだいたずらをしような友人は何人もいる。そこで、まず、どこかに隠しカメラがないか探したり、垣根の後ろから押し殺した笑い声が聞こえてこないか耳を傾けたりした。しかし、カメラも見つからなければ、笑い声もしなかった。静まり返った森には、自分の呼吸と飛び去っていくハゲワシの羽ばたく音が聞こえるだけだった。これは誰かのいたずらではなさそうだ。午前中、ハゲワシとその羽について書いた後で、ジョギングに出かけたら、本当にハゲワシに出会い、そのうちの一羽が頭上から

一枚の羽を落としたのである。

「テーマはこちらが選ぶのではなくて、やってくるのだ」と、利いたふうな格言を学部時代に受けた創作作文の授業で言われたが、そのときは、生態学も専攻していてよかったと思った。生態学では無味乾燥な表やグラフ、データセットを扱うので、そうした考えとバランスがとれると考えたからだ。今は、この格言が陳腐な決まり文句というよりは、命令のように思えた。古代エジプトでは、ハゲワシは千里を見通し、王国と真実や永遠の正義を象徴する存在として崇められていた。幸いにも、ハゲワシは私が快諾したいと思う命令を下してくれたのだ。羽の本を書くことに心が決まった。

樫の木にまだとまっている三羽のハゲワシに会釈をすると、私は羽を拾い、家に持ち帰った。その羽は今ここにある。これはハゲワシからの祝福であると共に、始まったばかりの探検と尽きることのない魅力の証でもある。